



 Data	2025-1
監督・製作・脚本: パトリシオ・グスマン	
出演: カタリナ・ガライ / ノナ・フェルナンデス / ニコレ・クラム / キティ / モニカ・ゴンサレス / マリア・ホセ・ディアス / マリア・ホセ・サンマルティン / クラウディア・ヘイス / ナタリア・エンリケス / シビラ・ソトマヨール / ダマリス・アバルカ / アロンドラ・カリリオ	

みどころ

世界中にドキュメンタリー映画の監督は多い。しかし、1941 年にチリで生まれたパトリシオ・グスマン監督ほど、1970 年にチリで初めて民主的な選挙で大統領に選ばれたアジェンデ大統領による社会主義政権の行方に注目した上、3 年後のその崩壊と新たに登場したピノチェト軍事独裁政権の非道ぶりを命がけで描いたドキュメンタリー監督はいないはずだ。

私が観た『チリの闘い』『第 1 部 ブルジュアジーの叛乱』(75 年)、『第 2 部 クーデター』(76-77 年)、『第 3 部 民衆の力』(78-79 年) (全 263 分) (『シネマ 39』54 頁) はとにかくすごかった。さすがに、その後の“弾圧の歴史 3 部作”たる『光のノスタルジア』(10 年)、『真珠のボタン』(15 年)、『夢のアンデス』(19 年) は観ていないから、その後、2019 年 10 月に首都サンティアゴの地下鉄料金値上げ反対闘争をきっかけとした住民運動(暴動?) が起き、2022 年 12 月の大統領選挙で“第 2 のアジェンダ”とも言うべき 36 歳のガブリエル・ボリッチが選出されたことも知らなかったが、それを新たにフォーカスしたパトリシオ・グスマン監督はすごい。そうだからこそ、パトリシオ・グスマン監督の最新ドキュメンタリー映画のタイトルは『私の思う国』とされたわけだが、まず、その内容は如何に？

続いて、その理想の現実化への道のりは如何に？1947 年 5 月 3 日に施行された日本国憲法は、一方で「平和憲法」と尊重されているが、他方で戦勝国アメリカからの「押し付け憲法」だ。2022 年の国民投票で改正が可決されたピノチェト憲法の改正の行方は？チリにおけるガブリエル・ボリッチ大統領の行方と憲法改正の行方に引き続き注目！

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■□■このタイトルはナニ？「想う」のはどこの国？監督は？■□■

映画の制作にあたっては、タイトルが重要。それはフィクションでもドキュメンタリーでも同じだが、ドキュメンタリーの場合、とりわけタイトルだけでテーマがわかることが大切だ。パトリシオ・グスマンが監督、製作、脚本した『チリの闘い』「第1部 ブルジュアジーの叛乱」「第2部 クーデター」「第3部 民衆の力」(全263分)(『シネマ39』54頁)は、そのタイトルを見ただけで、チリのアジェンデ政権の誕生とそれに対する軍事クーデターの政治的社会的背景を記録した壮大なドキュメンタリー映画であることがすぐに分かるものだった。

そんなドキュメンタリー映画を命がけて監督、製作、脚本したのが、ピノチェト軍事独裁政権下で最大の強制収容所とされていた国立競技場に収容され、1973年にキューバに亡命した後、スペインからフランスに渡ったパトリシオ・グスマン氏だ。『チリの闘い』3部作のうち、1978年に公開された『第3部 民衆の力』はピノチェト将軍による1973年の「9.11 軍事クーデター」によってアジェンデ政権が転覆された直後を描くドキュメンタリーだったから、同じドキュメンタリー映画でも第1部、第2部とは全く異質のものだった。

私が同作を鑑賞したのは2016年12/10だから、今やそれからすでに8年が流れている。しかして、現在のチリの政治軍事情勢は？寡聞にして、私はそれをしっかり把握していなかったが、何と本作はそのパトリシオ・グスマン監督の最新のドキュメンタリー映画。したがって「私の想う国」とは、当然チリのことらしい。そこまでわかれば、本作は必見！もっとも、そんな大作を観る機会は少ない。そこで本作の評論には同作の評論を添付しておくので、本作と合わせてじっくり勉強してもらいたい。

■□■ピノチェト軍事独裁政権は崩壊！そのきっかけは？■□■

2025年2月にはウクライナ戦争が丸3年を迎えるが、1/20にトランプ大統領が就任すれば、ホントに24時間以内に終戦が実現するの？それはわからないが、2024年12月には2代にわたるシリアのアサド独裁政権があっけなく崩壊してしまったから、ビックリ。実はそれと同じように(?)、チリでは2021年12/19に新しく36歳のガブリエル・ボリッチが大統領選挙に勝利し、直ちに憲法制定議会に臨んでいるそうで、私の知らない間にピノチェト軍事独裁政権が崩壊していたそうだから、ビックリ！しかし、それは一体なぜ？何がきっかけで、どのようにしてそれが実現したの？

私は2024年12/28にロンドン発のミュージカル映画『レ・ミゼラブル』の「デジタルリマスター／リミックス版」を20年ぶりに再鑑賞したが、そこでは1789年のフランス革命の後、王政復古していたパリで、また再び1832年に「10月革命」が起こる姿が、感動的なストーリーとうっとりする歌声の中で描かれていた。しかし、1970年に世界初の社会主義政権を世界初の民主的な選挙で実現させたチリのアジェンデ政権を、わずか3年で崩壊させてしまったピノチェト軍事独裁政権は、いつ、どのような過程で崩壊してしまったの？

私はそれを全く知らなかったが、本作を見ると、それは2019年10月のサンティアゴ市地下鉄の運賃値上げが契機になったらしい。地下鉄の値上げを拒否する若者たちは、“料金不払い”をあちこちで実践。その動きが全国に広がり、10/18の夜にかけて、抗議活動参加者と機動隊がサンティアゴ市内の各地で衝突、複数の地下鉄駅が火炎瓶などによる襲撃を受けて、地下鉄の運行が停止されたほか、イタリアの大手電力会社エネルのビル、チリ銀行の店舗が次々と炎上したそうだから、これはまるで内乱だ。

本作冒頭、パトリシオ・グスマン監督のカメラは路上に広がる石を追っていくが、これは一体ナニ？『レ・ミゼラブル』で観たとおり、1832年当時学生たちが築いたパリのバリケードに対するパリ市民の支援は長く続かず、多くの学生たちが孤立の中で死んでいったが、2019年10月、チリの首都サンティアゴの路上に広がる無数の石は？そして、その石を警官隊に投げ続ける無数の若者たちの闘いは・・・？

■□■1989年が激動の年に！その20年後、更なる激動が！■□■

『チリの闘い』全263分を観れば、世界ではじめて民主的な大統領選挙で社会主義政権を実現させたチリが、鉱業や金融業の国有化をはじめとして、資本主義経済から社会主義経済に構造改革していくのがいかに大変だったかがよくわかる。もちろんそこには、アメリカによる妨害活動があったはずだし、チリが「第二のキューバ」になることに対する反対キャンペーンが激烈だったこともよく理解できる。そのため、わずか3年後の1973年にピノチェト將軍による軍事クーデターが勃発して、アジェンデ政権は崩壊！アジェンデ大統領も死亡してしまったが、その後のピノチェト軍事政権はどうなったの？

1989年は日本でも、昭和が終わり、不動産バブルが崩壊した激動の年だったが、世界的にも、中国では天安門事件が起き（6/4）、ドイツではベルリンの壁が崩壊する（11/7）等、激動の年だった。そして、実はチリでも、前年の国民投票でピノチェト大統領の任期延長が否決され、1989年12月に実施された大統領選挙で、中道連合のパトリシオ・エイルウィンが選出され、ピノチェトは大統領を任期満了していたらしい。

ピノチェト独裁政権は新自由主義経済を導入し、表面的には「チリの奇跡」と称された経済成長を遂げると共に、外資導入や民営化による自由市場政策でインフレが抑制され、輸出産業も拡大したが、一方で経済的社会的格差が広がり、福祉の切り下げや労働者の権利侵害が深刻化した。また、強権的な統治の下で数万人が弾圧され、経済発展の裏で大きな社会的犠牲を伴ったようだ。このようなチリでも、1989年は大激動の年になったが、その20年後の2019年は、更なる激動が！パトリシオ・グスマン監督は、そんな1973年から1989年までの16年間のチリを、そして1989年12月から2019年10月までの20年間のチリをずっと見ていたわけだが、本作を監督・製作した動機は一体ナニ？そしてその足取りは如何に？

■□■出演は15人の女性たち。最初は目出し帽の女性から！■□■

『チリの闘い』全3部作に続く、パトリシオ・グスマン監督の『光のノスタルジア』（10

年)、『真珠のボタン』(15年)、『夢のアンデス』(19年)は、ピノチェト政権による弾圧の歴史を描いたドキュメンタリー3部作だが、さすがに私はそれを観ていない。観ていなくても、同作の登場人物たちはすべて弾圧されている側の人たちだから、明るい顔をしているはずはない。

それに対して、同3部作に続く最新の本作は、15人の女性たちのインタビューで構成されているが、その女性たちの顔は明るいものばかりだ。もっとも、冒頭に登場するのは「目出し帽の女性」だから、その表情の全体像は分かりにくい。しかし、目の輝きや喋り方の積極性だけで、この女性の未来に向けた明るさを、すぐに感じ取ることができる。さらに本作では、片目を隠した女性集団のパフォーマンスや催涙マスクとフードで顔全体を覆った女性たちがたくさん登場するが、そんな顔を見えない彼女たちからも前向きの力強さを感じ取ることができる。

本作のインタビューに登場する15人の女性のうち、前半は目出し帽の女性や、学生、作家、写真家、ボランティア救命士等、危険をものともせず、街頭闘争に立ち上がっている女性だが、1980年にピノチェト政権下で実施された憲法改正の可否を問う国民投票が79%の賛成で承認され、2021年5月の憲法制定議会選挙で決に必要な議席数を確保した後は、ジャーナリスト、政治学者、不法居住者、地域代表、映画監督、医師等、憲法制定議会で活躍する女性たちが次々と登場してくるので、それに注目！1946年11/3に公布され、1947年5月3日に施行された日本国憲法は、一方では「平和憲法」として尊重されているが、他方ではアメリカからの「押しつけ憲法」だと批判されている。さあ、チリの憲法制定議会の行方は如何に？

■□■これは暴動？内戦？革命？このエネルギーはどこから？■□■

本作は冒頭、パトリシオ・グスマン監督が、彼の初長編作品たる『最初の年』(71年)をフランスに持ち帰り、映画館で公開してくれた恩人からもらった「火事を撮影したいのなら、最初に炎が上がる場所に前もっているべきだ」との助言を、監督自身のナレーションで語るところから始まる。

彼は2019年10/18にブエノスアイレスで起きた「最初の炎」は撮影できなかったが、1年後の彼はその助言どおり、カメラを携えて、まるで石の雨が降ったかのように、あちこちに無数に散らばっている石の撮影を開始したから、すごい。もっとも、彼のカメラ越しに、映し出すスクリーン上の姿、とりわけ、初期の“地下鉄料金を払うな”運動(騒動?)の姿は、私には無秩序な若者の暴走(暴動)としか見えないものだった。これが改革や革命への第一歩？そんなバカな！私はそう思いながら、彼のカメラが映し出す現場の姿を注視したが・・・。

地下鉄料金を30ペソに値上げしたことが、国を燃え上がらせる火種になるとは、誰も想像しなかったことは、彼のナレーションでも語られるが、その争いは放火、商店の略奪に広がり、薬局や銀行の襲撃が横行したから、すごい。スクリーン上に映るその姿はまるで

内乱？内戦？革命？そんな疑問が湧いてくるのは当然だ。ところが、暴動から 1 年を経た 2020 年 10 月、ピノチェト軍事政権下で最大の強制収容所とされていた国立競技場で、1980 年に制定されたピノチェト憲法を改正するかどうかを問う国民投票が実施され、それが 79% の賛成で承認されると・・・。

幕末から明治維新下の日本では、大政奉還の後、坂本龍馬が立案した「船中八策」をもとに「五箇条の御誓文」が成立したが、それは維新の志士たちの命がけの奮闘によるものだった。逆に 1947 年 5 月 3 日に施行された日本国憲法（平和憲法）は、日本国民の意思はほとんど関与していない、戦勝国アメリカからの提案押し付けによるものだった。しかし、本作後半に見るピノチェト軍事政権下で完全に閉鎖されていたチリの議会が再開している姿と、そこでの新憲法制定に向けての議論の姿を見ていると・・・？しかも、2021 年 12/19 の大統領選挙では 36 歳のガブリエル・ボリッチ氏が保守系候補を破り、2022 年 3/11 には第 38 代大統領に就任したからすごい。パトリシオ・グスマン監督のカメらは、そんな姿を「今度こそ！」の期待を込めて追い続けていくので、それをじっくりと鑑賞したい。

■□■憲法制定議会のその後は？ボリッチ大統領のその後は？■□■

パトリシオ・グスマン監督は本作で、2019 年 10 月に突然サンティアゴで起きた地下鉄料金の値上げ反対闘争から、2021 年 12 月の大統領選挙で勝利したボリッチ候補の勝利宣言までを描いた。そしてそれは、主として現場に持ち込んだカメラで撮影した前述の 15 人の女性へのインタビューで構成されている。憲法制定議会に登壇し、発言する女性たちの話を聞いていると、実に前向き。また、パンフレットに掲載されているボリッチ候補の勝利宣言も実に心強いものだ。しかして、憲法制定議会のその後は？

本作のパンフレットが作成された 2024 年 12 月 20 日時点の現状としては、ボリッチ大統領は新憲法法案の否決や政権議会での敗北など、改革推進に苦戦しているらしい。また、パンフレットによると、憲法改正への道のりは険しく、2022 年 9 月の国民投票では、反対 62%、賛成 38% の大差で否決されたそう。そればかりか、2023 年 12 月に実施された 2 度目の国民投票でも、右派勢力の意見をかなり色濃く反映させた第 2 次草案について、左派が反対キャンペーンを展開した結果、反対 56%、賛成 44% で否決されたそう。そんな現状を見ると、チリの改革への道筋はなお多くの困難を抱えていることが明らかだ。

1941 年 8 月にチリで生まれたパトリシオ・グスマン監督はすでに 80 歳。アジェンデ政権登場後の高揚ぶりがヒシヒシと伝わってくる長編『チリの闘い』『第 1 部 ブルジュアジーの叛乱』（75 年）からすでに 50 年が経過している。さてパトリシオ・グスマン監督の目の黒いうちに、チリの再度の改革は成るのだろうか？本作の鑑賞を契機に、それを引き続き注視していきたい。

2025（令和 7）年 1 月 6 日記



🎬🎬 みどころ

1970年9月のアジェンデ大統領の当選は、今年11月のアメリカでのトランプ大統領の当選以上のハプニング！民主的選挙による人民連合政府（社会主義政権）の誕生は、世界初の大ニュースだった。

その3年後の1973年9月11日の軍事クーデターによって大統領府は空爆され、アジェンデは自殺（諸説あり）したが、何とそれが命懸けの撮影によって本作に！

「第1部 ブルジョワジーの叛乱」と「第2部 クーデター」のリアルさはとりわけすごい。

「第3部 民衆の力」は解説調だが、そこでもアジェンデ支持派と政権転覆に動く勢力との手に汗を握るせめぎ合いが興味深い。こんなすごいドキュメンタリー映画は2度と生まれなだろう。軍事力による中国本土の解放（革命）やキューバ革命は知っていても、平和的な「チリの闘い」は知らない人が多いだろうから、本作は必見！

■ああ話題作をやっと鑑賞！■

本作より先に観た『コロニア』（15年）は、1973年9月11日の軍事クーデターで誕生したチリのピノチェト軍事独裁政権の下で「コロニア・ディグニダ」なる拷問施設が存在したことを「告発」する映画だった『シネマールム38』161頁参照。『ハリー・ポッター』シリーズの子役から大きく成長（成熟？）した女優エマ・ワトソンを主演としたコロニアへの潜入（？）と脱出劇の多少の粗さや甘さは別として、ピノチェト政権とナ

チスの残党が結託したこんな極秘要案が存在していたことを本作ではじめて知ってビックリ。

本作に登場する1970年9月4日の大統領選挙で36.2%を獲得して、元大統領のアレックスサンドリの34.9%、第三候補のキリスト教民主党のトミッチの27.8%に辛勝し、議会もアジェンデを大統領に選出したため、11月3日には世界ではじめて自由選挙によって社会主義政権であるアジェンデ人民連合政権が誕生した。しかし同政権は、その3年後の1973年のピノチェト将軍らによる9.11軍事クーデターにおける大統領府の空爆によって崩壊し、最後まで大統領府からの撤退を拒否したアジェンデ大統領は大統領府内で自殺した（諸説あり）。しかし、ピノチェト政権はその後1990年に崩壊するまで17年間も続いたから、アジェンデ大統領を支持した左翼や人民勢力は大変だったはずだ。

1975年の第1部「ブルジョワジーの叛乱」、1976年の第2部「クーデター」、1978年の第3部「民衆の力」、合計263分の超大作『チリの闘い』3部作は『コロニア』の公開と同じ時期に3部作が一挙に公開され、『キネマ旬報』10月上旬号では3人の評論家が星5つ、4つ、5つをつけていたので何とか観たかったが、タイミングが合わず見逃していた。それを、やっと今回鑑賞することに。

■こんな軍事クーデターが目の前で現実に！■

「ブルジョワジーの叛乱」とタイトルされた第1部の冒頭は、アジェンデ大統領が執務するモネダ宮殿が空爆されている映像から始まる。これが1973年の9月11日正午頃に起きた軍事クーデターの現場で撮影された現実の姿だ。もちろん内部の様子はわからないが、破壊され煙を上げている宮殿の中からの脱出をあくまで拒否したアジェンデ大統領が、その中で名言ある「自殺」の道を選んだことは容易に想像できる。それは「本能寺」を明智光秀の大軍に襲われたことを知った織田信長が「是非に及ばず」とすぐに観念し、切腹した心情ときっと同じだ。しかし、力と力による弱肉強食の時代の戦国時代ならともかく、1970年9月4日の民主的選挙で大統領に選ばれ、その後三年半余りを大過なく政権運営し、1973年3月の議会選挙でも人民連合は43%の得票率を確保し、野党は大統領解任に必要な3分の2の議席獲得に失敗していたのだから、その約6カ月後にこんな軍事クーデターを起こすのはもっての他、民主主義の否定であることは明らかだ。

そこで問題は、誰がどう仕組んでこれを起こしたのかということになる。明智光秀の謀反については諸説あるが、この軍事クーデターは歴史上はじめて民主的選挙によって誕生した社会主義政権であるアジェンデ人民連合政府を倒すために、アメリカのCIAがチリの野党や反共勢力、軍部と協議を重ね、さまざまなやり口で失敗を重ねた挙句の最後の手段であったことが、本作を見ているとよくわかる。

なるほどそうだったのか！映画にはよく冒頭に「事実に基づく物語」という字幕が出る

ことがあるが、それはあくまで事実に基づいて製作し脚色し、それを俳優たちが演じた物語という意味。しかし本作はそうではなく、あくまでドキュメンタリー映画だから、その撮影や編集に製作者側の視点や判断が含まれているにしても、フィルムに収めた冒険の大統領府の情報はあくまで現実そのものなのだ。さあ、そんな全3部作の展開は……。

■選挙の事前取材は？クルーたちのスタンスは？■

冒頭にショッキングな映像を短い時間で見せつけた後、スクリーン上は6カ月前に遡り、アジェンデ政権誕生後およそ2年半が経過した1973年3月の議会選挙の事前取材の風景を延々と描いていく。市民への質問は「選挙に対するあなたの立場は？」「チリの将来についてどう思うか？」等の定型的なものだが、それに対する市民の反応は①アジェンデを支持する労働者階級②国民党を支持する反共主義のブルジョワ③政治に関心のない人々と3つに分かれている。これは日本で年中行事のように行われている国政選挙や地方選挙で見られる風景と同じだし、今年最大のイベントとなった11月8日のアメリカ大統領選挙に向けての事前取材の風景とも同じだ。

ここで注目すべきは、テレビ局「チャンネル13」と名乗っているのは真っ赤なウソで、取材をしている撮影隊は実は本作を監督・製作・脚本したパトリシオ・グスマンのスタッフということだ。日本ではそんなインチキは到底考えられないが、未だ民主主義や法治が成熟していない1973年当時のチリではそれが可能だったらしい。アメリカ大統領選挙では開票の中盤からトランプの優位が明確になり、終盤からラストに至るまでそれが変わらなかった。しかしスクリーン上の風景では、中盤にキリスト教民主党政の優勢、人民連合の敗北と発表され、キリスト教民主党政の支持者たちは勝利の喜びを爆発させていたにもかかわらず、真夜中過ぎに判明した投票結果では、野党は支持率を伸ばしたが、大統領解任に必要な（3分の2の）圧倒的多数を形成するには程遠かった。むしろ人民連合は、前回選挙とはほぼ同じ得票率に終わったとはいえ、議席数を増やしたことが明らかにされていく。本作ではグスマンたちスタッフの議会選挙の事前取材の姿と並んで、人民連合支持派たちのデモの風景が頻繁に登場する。これは昨



© 1975, 1976, 1978 Patricio Gúzman



© 1975, 1976, 1978 Patricio Gúzman

今韓国で何番のようにくり返されている大動員デモの姿と同じだが、チリもこれだけの人民連合支持部の積極行動があったからこそ、アジェンダ大統領を支持する議員たちが依然として43%という高い支持率を獲得できたわけだ。

■CIAや右派など反対派の策謀は？■

日本では戦後復興の混乱期を経た後、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、大平正芳、中曽根康弘と歴代自民党政権が続いたが、1993年8月にはじめて細川護国8党連立政権が誕生したことによって自民党が野党に転落した。さらに、小選挙区制の導入によって次第に二大政党制となり、2009年8月の総選挙では民主党への「政権交代」が実現した。そして、その後2012年12月26日の総選挙で「再度の政権交代」となり、今日の安倍長期政権に至っている。

このように日本では民主的選挙を通じてしか「政権交代」はありえないが、2016年11月25日に死亡したフィデル・カストロが成功させた1959年1月のキューバ革命は軍事革命。したがって、その転覆のためアメリカがCIAを通じてあらゆる軍事的手段を検討し、ビッグス湾事件によってそれを実行したのは仕方ない。しかし、民主的選挙を通じてアジェンダ社会主義政権が誕生した以上、それを軍事的で転覆するのは無茶。これをひっくり返すのは次の民主的選挙で、というのが民主主義の原理原則だ。したがって、1973年3月の議会選挙はキリスト教民主党を中心とする野党や、反人民連合勢力にとって唯一のチャンスだったわけだが、そこで人民連合派が意外に頑張り、野党がアジェンダ大統領の解任に必要な3分の2を確保できなかった以上、アジェンダ大統領体制が続くのが当然。それが民主主義のルールだが、チリはそうではなかったことが本作を見ているとよくわかる。さて、CIAや右派などの反対勢力はアジェンダ政権を転覆するためいかなる方策をとったのだろうか・・・。

■命懸けの撮影！2度と撮ることのできない映画！■



● 1975, 1976, 1978 Patricio Gaudín

本作のパンフレットにある達山純生氏の「チリの闘い解説（製作背景＋作品解説）」を読むと、「三年目」と名付けられたグスマン監督らのチームが、ファシスト勢力に対する労働者や農民を中心とした国民の闘争をフィルムに収める活動を継続することの危険性をよく知っていたことがよくわかる。また、今にも爆発しそうな自国の

状態と差し迫った変化に対して充分に意識的であった彼らが、自分たちの映画が価値ある歴史的記録としての役割を果たすことになると考えていたこともよくわかる。

第1部のラストと第2部の冒頭には画面が激しく傾くシーンが登場するが、これは字幕で「ヘンリクセンに押さえる」と表示されたとおり、1973年6月29日の朝サンティアゴで起きたいわゆる「タンク騒動」(機甲部隊によるクーデター未遂事件)を撮影していたカメラマンの



● 1975, 1976, 1978 Patricio Guzman

ヘンリクセンに対して発砲した軍人の弾が命中し、ヘンリクセンがカメラを回したままの状態で倒れてしまったためだ。これをはじめとして、本作の撮影はまさに命懸けであり、本作を奇蹟的に完成させることができたのは、撮影したフィルムを国外に持ち出すことに奇蹟的に成功したためであることがわかる。したがって、1973年9月11日の軍事クーデターで誕生したピノチェト軍事政権下のチリで、本作が公の場で上映されることがなかったのは当然だ。グスマン監督も本作完成のために赴いたキューバで6年間を過ごした後はチリに戻ることはなく、スペイン、フランスへと移り住んで、次々とドキュメンタリー作品を監督し続けたらしい。

ちなみに、彼の長編第8作にあたる『チリ、頑固な記憶』(97年)は、やっと1997年になってチリに帰国し、本作をアジェンダ時代を知らない若い学生たちやかつての闘争を目撃した、あるいは闘争に参加した人々に見せた際の彼らの反応を主題の一つにしたドキュメント映画らしい。遠山純生氏の解説は「最後に、『チリの闘い』完成から十四年後に、同作をめぐって作家が述懐したことばを紹介する。」としているので、ここであえてそれを引用すれば、次のとおりだ。

「若くて幸運にもある種の波紋を映画に撮ることができたと思います。しかしそのときには、何が起きているのかわかっていないものです。歳を取ると、それが何だったのかほんの少し理解し始める。かつてと同じように今でも、いろいろな人を通じて『チリの闘い』の持つ重みを実感させられます。『チリの闘い』は二度と撮ることのできない映画です。たまたまほかに類を見ない状況に遭遇し、無我夢中でそれをフィルムに収めました。もう二度とあんなことは起こらないでしょう」

ちなみに、今回の『チリの闘い』の上映を契機に日本で公開される『光のノスタルジア』(11年)、『真珠のボタン』(15年)は彼の直近の作品らしいから、それにも注目!

■第1部で描かれるテーマは？■

『チリの闘い』全3部作は1973年の9・11軍事クーデターで大統領府が空襲される短いシーンが最大のハイライトだが、第1部「ブルジョワジーの叛乱」と第2部「クーデター」では、そこに至るまでのCIAと結びついたチリの右派勢力とアジェンダを支持する人民連合とのさまざまなテーマの闘いが描かれる。

私が学生運動の中で勉強した限りでは、社会主義政権が誕生すれば順次土地や資本（企業）を国有化していくことになるが、チリ憲法を尊重し、それに従い、彼の社会主義改革は憲法のどの要素も侵食しないという確認の憲法保証令に署名することを条件に議会から大統領に選出されたアジェンダ大統領は、それをどのように実現していったの？また、それに対する右派勢力の抵抗とは？

第1部「ブルジョワジーの叛乱」では、それを①買収だめと闇市場②議会のボイコット③学生暴動④経営者組合の攻勢⑤銅山ストライキ、というテーマに分けて見せてくれるのでそれを1つずつじっくりと勉強したい。

■第2部で描かれるテーマは？■

第2部「クーデター」では、1973年6月29日に起きたいわゆる「タンク事件」でヘンリクセンがカメラを抱えたまま倒れる衝撃的なシーンを再度登場させた後、このクーデター未遂事件の詳細を描いていく。軍部によるクーデター計画は、3月の議会選挙で野党の思うような結果とならなかったため、軍の右派によってその実行が決定されていたそう。ところが、このクーデターに対して議会や野党は沈黙を守り、軍の主力も支援しなかったため、このクーデターは結果的に未遂に終わっただけ。

本作第2部は、その後1973年9月11日に決行された軍事クーデターに向けて、次の動きを時系列に沿って詳細に描いていく。すなわち、①人民連合派が国内で次々と設立を目指す産業コルドン（地域労働者連絡会：複数の工場や企業の従業員からなる組織）の案、②アジェンダが議会に提出した非常事態関連法をめぐる攻防の姿、③前年に議会を通過していた銃砲取り締まり法案を用いた、軍による合法的な工場の捜索と労働者の拘禁、尋問の姿、④7月5日にアジェンダが発足させた新内閣によるキリスト教民主党との協調の姿、⑤アジェンダ政権を守ろうとする労働者・人民連合勢力による大規模デモの姿、⑥徐々に拡大していく軍部による武力攻撃の姿、等だ。

キューバ革命を成功させたフィデル・カストロとチェ・ゲバラは自分たちの軍隊を持っていたし、日本を中国から駆逐し、その後は国民党を台湾に追い出した中国共産党も人民解放軍という自分の軍隊を持っていた。しかし、民主的な選挙によって大統領に就いたアジェンダ人民連合政府は自分の軍隊を持っていなかったから、軍部が反抗し、武力で軍事クーデターを決行すれば、それに対抗できないのは当然。そう考えると、やはり平和革命、

社会主義への平和的手法での移行はムリで軍事革命しかないの？本作の第1部、第2部を
観ていると思わざるをえないが、さて・・・。

■同じドキュメンタリーでも第3部は全く異質！■

私は本作を鑑賞する前から、『チリの闘い』
3部作のタイトルが「第1部 ブルジョワ
ジーの叛乱」「第2部 クーデター」「第3部 民
衆の力」とされていることに大きな違和感を
持っていた。なぜなら、1973年の9、1
1軍事クーデターでアジェンデ政権が崩壊し、
ピノチェト軍事政権に取って変わられたのだ
から、「民衆の力」など示すことができな
かったのが歴史的事実であるためだ。

そんな疑問をもったまま私は第3部「民
衆の力」を鑑賞したが、なるほど、第2部
の公開から2年後の1978年に公開された
第3部「民衆の力」は、歴史の針を第1部と
第2部以前の1972年に戻し、アジェンデ
政権が大規模な社会変革に取り組み始めてか
らまだ1年半しか経ってはいなかった頃、大統
領が熱狂的に民衆を迎えられるパレードのシー
ンから始まる。前述した遠山純生氏の「チ
リの闘い」解説（製作背景＋作品解説）では、
「三年目」と名付けられたグスマンのチーム
は、1973年3月から半ば秘密裏に撮影を
開始したと書かされていたから、第3部の冒頭
を飾るこの映像は1973年3月より以前の
（比較的平和な時期に）、グスマン監督が撮り
留めていたフィルムを活用したものと考えら
れる。

したがって「第3部 民衆の力」は同じド
キュメンタリーでも、「三年目」チームが1973年3月から半ば秘密裏に命懸けで撮影し
た「第1部 ブルジョワジーの叛乱」「第2部 クーデター」とはかなり異質で、過去を振り
返っての解説調になってくる（？）が、その是非は・・・？



● 1975、1976、1978 Patricio Guzmán



● 1975、1976、1978 Patricio Guzmán

■第3部で描かれるテーマは？■

第3部「民衆の力」は①冒頭のバレードの姿に続いて、次のテーマを描いていく。すなわち、②1972年10月以降の、野党の中でも最も強硬な国民党が主導するアジェンデ政権打倒のための大規模なトラック業界のストライキの姿と、それを阻止するために多数の産業界の組合が力をあわせて製品を近隣地域に運ぶ姿、③広範な物資不足を作り出すため、反アジェンデ派が進めた生活必需品買いだめの姿と、それを鎮静化する政府と大衆組織の姿、④反アジェンデの動きに対抗するため、同じ地域の労働者たちの仕事を調整する複数の工場、企業の連合体としての産業コルドン（地域労働者連絡会）が次々と結成され、これがチリの民衆勢力の萌芽となっていく姿、等々だ。

なるほど、一国だけでの憲法を尊重した上での社会主義的改変はこれほど難しいわけだ。資本主義国では、工場や企業のストライキは労働者がするものと相場が決まっているが、社会主義的改変を目指していた1972年当時のチリでは、企業がストライキを行っていることにビックリ。南北に細長い地形になっているチリでは運送業界が産業の生命線になっていたため、トラック運送業者たちがそのストライキの中心になっていたことがわかると、さらにビックリだ。

■カメラが追っていく第3部の更なる論点は？■



© 1975, 1976, 1978 Patricio Guzmán

「民衆の力」と題された「第3部」のカメラは、続いて次のような論点を次々と追っていく。すなわち、⑤アジェンデ政権は自分のための軍隊はもたなかったが、1972年11月5日にはキリスト教民主党との協議を経て軍司令官を入閣させて第二次アジェンデ内閣を発足させた。とりわけ、アジェンデが信頼し、民主制を尊重する陸軍総司令官ブラッツを内務大臣に就任させたことによって、左派の労働者の多くは反政

府勢力に対する抑止力になるのではないかと期待されたが、さてその現実とは・・・？⑥そんな期待通り、反アジェンデ勢力による大規模なストライキは11月10日には終了し、1972年の「十月スト」は政府側には失敗したが、アジェンデ政権に手ひどい経済的ダメージを与えることに成功したため、その影響力の広がりとは・・・？⑦「十月スト」以降は「民衆の力を作り上げよう」というスローガンが国中で唱えられるようになり、一方では産業コルドンが国内の主要都市で次々とつくられ、他方ではもう1つの「人民勢力」として学生、主婦、労働者、農民からなる独特の「地域部隊」が結成され始めたが、その影響力の広がりとは・・・？⑧1973年も半ばになると、反アジェンデ政権の動きと左右

の対立がますます激しくなる中、遂に軍部が「ある決断」を下すと・・・？

民主的な選挙で大統領に選出されたアジェンデが憲法の枠の下にあったのは当然だが、チリでは軍部が憲法の下で合法的に存在していたのだから、国有化を核とする社会主義的改革を進めると同時に、軍部を味方にも引き入れるための工作をもっと強力にやるべきだったのでは・・・？1973年の9、11軍事クーデターの悲しい結末を見ているとどうしてもそう思うのですが、さてその答えは・・・？

■激動の2016年に続く、2017年の大胆予測は？■

2001年の9月11日に発生したアメリカでの同時多発テロも、2011年の3月11日に発生した東日本大震災も、誰もがその発生を予測できなかったのは当然。また、今年11月8日のアメリカ大統領選挙でのトランプ氏の当選を多くの人が予測できなかったのと同じように、1970年9月4日のチリの大統領選挙でのアジェンデ大統領の誕生を多くの人が予想できなかったのも当然だ。すると、1973年の9、11軍事クーデターを予想できなかったのも当然？いやいや、本作を観ていると決してそんなことはなく、時期が早い・遅いの違いはあってもそれは当然に予測できたものでは・・・？



● 1975、1976、1978
Patricio Guzmán

そんな日で、現在多くの新聞が特集している2016年の十大ニュースを見ていると非常に興味深い。最近少しずつ明らかになってきたトランプ大統領の「人事配置」や「なぜ1つの中国をアメリカが認めなければならないのか？」等の新しい「トランプ語録」を見ていると、米ロの親密さ(?)に比べて、意外に米中対決の姿勢が強いことがわかる。その結果(?)12月26日の新聞各紙では、中国製の空母「遼寧」が東シナ海やフリゲート艦を従えて、渤海、黄海、東シナ海を通過した後、いわゆる「第1列島線」を越えて西太平洋に進出したこと、その航海では実弾射撃や戦闘機の離発着等の訓練が行われていることが報じられた。トランプ大統領の誕生が決まった翌日にはアメリカでも日本でも株価が大暴落したが、その後は一貫して上昇を続け、今やアメリカは

2万ドルの大台突進も目の前に迫っている。2017年は政治も経済もそして外交も軍事も順調に推移してくれることを願っているが、さて激動の2016年に続く2017年の大胆予想は？

1970～73年にチリで実証に起きたアジェンデ政権をめぐる本作のドキュメンタリー映像を観ていると、ついそんなことを考えてしまったが・・・。

2016(平成28)年12月27日記